

## 〔論文審査結果〕

論文提出者：烏日麗格

審査対象論文：政治体制移行期前後のモンゴル国都市家族の変容

論文審査委員：井上治教授、坂部晶子准教授（名古屋大学）、林裕明准教授、中川敦講師

飯田泰三非常勤講師

## 【論文審査結果の要旨】

2015年9月24日、学内審査委員4名、学外審査委員1名により論文審査が行われた。烏日麗格氏が提出した学位請求論文は、全251頁を有し、形式上には大きな問題はないが、文献リストが見つらいことが指摘された。また、学位請求論文提出に先立ち、全国学会で学術報告を行ったこと、『北東アジア研究』第26号に単著論文「政治体制転換期以降のモンゴル国の都市家族に見える夫婦の役割分業に関する研究—モンゴル国の首都ウランバートル市を調査対象に—」が掲載されたことも確認された。

烏日麗格氏の論文は、1992年にそれまでの社会主義を完全に放棄して民主化の道を歩み出したモンゴル国（旧モンゴル人民共和国）の政治・経済体制の移行を切り口に、次の三点を明らかにすることを目的としている。第一に、体制移行前後の家族の変容に関する家族社会学的研究として、1921年から70年間の社会主義時代、ソ連のペレストロイカの流れを受けた1989年からの民主化への移行、1992年に始まる民主主義時代、これら時代を経験して形成された都市家族に着目し、モンゴルの社会主義時代と民主主義時代の都市家族の特徴とその生成要因を明らかにすることである。第二に、牧畜・遊牧という伝統的な生業形態を持ち、社会主義国家・計画経済から民主主義国家・市場経済への移行という異なるイデオロギーと経済システムを経験した北東アジア国家の都市家族の変容理論を構築することである。第三に、一部の近代家族論者が、「近代家族」とそれに次いで現れると主張する「個人化する家族」への傾向を参考にしながら、前近代に遊牧社会で作られた家族が、社会主義時代を経て、民主主義と資本主義という新しい主義・体制の中に生きてゆく21世紀における家族のあり方を展望して、北東アジアにおける家族変動を貫く理論を探求することである。

これらの目的を達成するために烏日麗格氏は、落合恵美子が『21世紀家族へ』で示した近代家族の8つの特徴を再整理し、①家内領域と公共領域が分離されているかどうか、②夫婦の役割分業は男が公共領域、女が家内領域という性別役割分業であるかどうか、③家族成員間は強い情緒的關係で結ばれているかどうか、④子ども中心主義であるかどうか、⑤家族の形態は核家族世帯で非親族を排除し社交が衰退しているかどうか、⑥家族の集団性が強いかどうか、この六点につき、モンゴルの社会主義時代と民主主義時代の都市家族の状況から分析した。一連の考察と分析にあたっては、氏が独自に行ったアンケート調査と聞き取り調査の結果や自ら収集した文献・統計資料を用いている。

第一章では、住居空間構造、生業と家庭、国家と家庭生活の三つの面で、家内領域と公共領

域が分離されたか否かを検討する。社会主義時代には、集合住宅に暮らす家族は空間的に外部から分離され、周囲に仕切りの無いゲルで生活する家族は分離されなかった。生産と生業は家内領域から切り離され、職場と生活の場が分離された。社会主義イデオロギーが家族に介入し、国家が家族に関わる福祉政策を担った。一方の民主主義時代には、集合住宅に居住する家族は引き続き外部から分離され、ゲル地区において数個のゲルを囲うハシャー（板仕切り）内に住む家族も外部から分離された。社会主義を放棄した国家は福祉機能をも放棄して各家族に戻し「私」が「公」から分離した。以上から、「家内領域と公共領域の分離」は社会主義時代には形成されず、民主主義時代に形成された、と主張する。

第二章では、男は公共領域で女は家内領域という性別役割分業の形成を検討する。社会主義時代と民主主義時代の家族における役割分業意識を考察し、役割分業の実態の多様化を確認した上で、社会主義時代と民主主義時代の都市家族には、歴史的な生活と経験、そして牧畜という生業形態から抜け出していない部分が認められるとし、男は公共領域で女は家内領域という性別役割分業は、社会主義時代と民主主義時代のいずれにあってもモンゴル国の都市家族の特徴ではなかった、と述べる。

第三章では、家族成員間が情緒的關係で結ばれているかを検証する。社会主義時代でも民主主義時代でも、夫婦間は情緒的關係を求めるが、近代家族の夫婦間の情緒的關係である性と愛と生殖の結婚を通じての一体化は、社会主義時代でも民主主義時代でもモンゴル人の規範意識にはならなかったとし、社会主義時代でも民主主義時代でも家族成員間が情緒的關係で結ばれてはいなかった、と主張する。

第四章では、子ども中心主義を検証する。社会主義時代には子どもは国家によって正しく教育される対象となり、家庭は子どもを育てる役割を担った。親は子どもを公教育に任せて仕事に専念した結果、子どもは親から引き離され、親の愛情をたっぷりとは注がれなかった。社会主義崩壊後、子どもの教育と社会化の機能が家庭に戻ったため、子どもは親との絆を深め、親は子どもの成長と発展を重視して、子どもに愛情をたっぷり注ぎ込むようになった。ただし、現在のモンゴルの都市家族は子ども中心主義の萌芽的状态にあるに過ぎないので、子ども中心主義はいずれの時代にも家族の特徴ではない、と主張する。

第五章では、家族をめぐる社会的ネットワークの変容を分析して、非親族の排除、核家族、社交の衰退を検証した。非親族の排除と核家族はすでに社会主義時代以前からあり、社会主義時代には核家族の志向があったが、家族成員以外の親族を受け入れることも見られた。民主主義時代では、家族以外の親族を世帯から排除するようになり、社会主義時代よりも核家族の志向が強まった。親子間・親戚間の社会的ネットワークとしての互助関係はいずれの時代でも保たれていた。社会主義時代に比べて民主主義時代には近隣との社交は衰退したが、親族との社交は衰退していない。以上から、非親族の排除と核家族はいずれの時代においても都市家族の特徴であり、社交の衰退は民主主義時代に現れた現象である、と述べる。

第六章では、家族の集団性が強化されているかどうかを、家族とその中の個人に対する考え、

家族行動、家族成員の情緒的サポートなどから検証したところ、家族の集団性の強化は社会主義時代でも民主主義時代でもモンゴルの家族の特徴であり、家族の集団性が崩壊して個人化へと進んで個人の生きがいを重視する現在の状況は、家族を大事にすることを前提としている、と述べる。

第七章では、ここまで進めた仮説の検証を総括して、社会主義時代と民主主義時代それぞれの時代の家族の特徴を明らかにし、家族が個人化へ進むかどうかを検討した。その結果、「近代家族」とそれにつづくことされる「個人化する家族」への推移は、社会主義時代と民主主義時代への移行を経験したモンゴルでは成立していないことを指摘する。また、仮説に設定した近代家族の諸特徴を、モンゴルの都市家族の特徴として成立した項目と成立しなかった項目に分け、その各々の生成要因に対する考察から、社会主義から民主主義への体制移行を経験した国家の民主主義的 21 世紀家族は、従来の近代家族論による「近代家族」の特徴を備えるが、それは落合の「近代家族論」でいう一時的、歴史的に表れるものではなく、社会主義時代と民主主義時代を通じて徐々に形成され、21 世紀に入って「近代家族」の特徴を持つ、と論じる。

終章では、北東アジアの一角を占め、社会主義近代化と都市化、脱社会主義化を経験した遊牧社会の都市家族は、社会主義時代のイデオロギーによって形成された社会主義的近代家族、遊牧生活に立脚するモンゴル人の根強い意識が復活して現出した民主主義的近代家族、そして「個人化する家族」の一部の特徴を含みつつ、それらが漸進的に強まっていった、本論文の仮説である近代家族の特徴を表す家族—将来の 21 世紀家族—へと変容する、という変動理論を提示している。また、終章の末尾では、この変動理論が従来の近代家族に関する研究結果とは正反対となっていることと、モンゴルの都市家族は時代とともに変容して現在に至り将来への変容を続けるのであって、従来の学説にあるような家族の崩壊・解体は起こらないことを主張して、自説の独自性を強調している。

烏日麗格氏は、モンゴルにおける家族研究をサーベイし、日本や欧米で展開されてきたような近代家族論的研究がモンゴルの都市家族については為されていないことを確認した上で、近代家族論や「個人化する家族」論のなど家族社会学の先行研究を詳細に検討している。その上で、落合恵美子が示した近代家族の諸特徴を仮説として設定し、さらにその仮説を整理して考察の流れをデザインした。このデザインに沿って、烏日麗格氏が独自に実施したアンケートとインタビュー、従来非公開のものも含む統計資料を駆使して仮説を検証し、その過程で、伝統的遊牧生活、家族に強制された社会主義イデオロギー、社会主義崩壊と民主主義政権が可能にした伝統的な家族意識の復活、という家族の変容要因を浮き彫りにした。これらを踏まえて結論で提示した理論は、日本や欧米という資本主義の農耕社会に存在する家族を対象とはするものの、それとは異質な遊牧社会の家族や社会主義国の家族を十分に取り扱っていなかった従来の近代家族論が提示しなかった、斬新で画期的な結論であると評価できる。論文の全体構成はよく整理されており、具体的な事例による論証の積み重ね方も洗練されていて、全体として大変にわかりやすい論文となっている点も高く評価できる。このように、烏日麗格氏の学位請求

論文は、博士論文として十分な水準のものとなっていると審査員一同は評価した。また、前近代から社会主義を経て市場化を迎えた現在に至るまでのスパンの長い時間の家族の変遷を、独自に収集した詳細な一次データを使って研究したこと、近代家族論を慎重に分析した上で社会主義時代の家族に当てはめ、モンゴルの家族のイメージを出そうとした野心的な研究であること、モンゴルでは社会主義時代に初めて近代家族が誕生したという見解は興味深いものであることなども高く評価された。

その一方で、審査委員からはこの論文に存在するいくつかの問題点や疑義が指摘された。まず、本論文が達成した事柄や学界に与えると思われるインパクトが十分にアピールされていないように思われるので、口頭試問でこの点を明確にしたいとの意見が示された。また、烏日麗格氏が仮説に据えた近代家族の特徴はあくまで理念型であり、この理念上の近代家族の特徴をモンゴルの都市家族の事例で分析し理論を提示しているが、本来であればインタビュー回答のような独自性と一次性に富んだ資料を詳細に分析するなどの方法で烏日麗格氏が独自にモンゴルの都市家族の事例を分析して、落合の所論に縛られない仮説や分析枠組みを構築するべきであり、また結論も理念上の近代家族の枠を越えるべきではなかったかという問題が指摘された。また、同じく方法に関する疑問点として、資本主義国家に生まれた近代家族論をモンゴルの社会主義時代の家族に適用することは方法論としては不十分ではないかとの意見が示された。次に、現在の日本の家族は情愛にだけ頼った情緒的關係のみで成立していると言われているが、モンゴルでは「社会主義時代でも民主主義時代でも家族成員間が情緒的關係で結ばれてはいなかった」とする烏日麗格氏の見解には疑問の余地があるとの意見があった。次に、この論文の目的に「北東アジア国家の都市家族の変容理論を構築する」、「北東アジアにおける家族変動を貫く理論を探究する」ことを挙げているが、論文で示した変容理論が北東アジア規模のものとなっているかが疑問とされた。また、社会主義時代においては国家が担っていた福祉政策が、社会主義崩壊後の民主主義国家では家庭に戻された一連の経過を、「私」が「公」から分離したものであるとの烏日麗格氏独特の見解が示されているが、実は、社会主義時代に国が担っていた福祉を、民主主義時代に入ってから、家庭という私的領域に位置付けたと見るのが家族社会学の通例であることが指摘された。また、烏日麗格氏は、社会主義から民主主義への体制移行を経験した国家の民主主義的 21 世紀家族は、従来の近代家族論が明らかにしてきた「近代家族」の特徴を備えるけれども、それは落合の「近代家族論」でいう一時的、歴史的に表れる特徴ではなく、社会主義時代と民主主義時代の歴史の各段階で徐々に形成され、21 世紀に入って「近代家族」の特徴を表すものである、と主張するが、「一時的、歴史的に表れる特徴ではない」とする見解は誤りではないかという意見が示された。

以上のような大きな問題以外にも、「現在のモンゴルの都市家族は子ども中心主義の萌芽的状态にある」とするが、この「萌芽的状态」とはどのような状態を指しているのか不明確であるなど、細々とした問題も指摘された。

これらのうち、大きな問題点を中心に公開審査の口頭試問を通じて烏日麗格氏の見解や真意

を質して確認することとした。

## 6. 口頭試問の結果の要旨

公開審査での口頭試問は、烏日麗格氏による論文要旨紹介ののち、質疑応答が行われた。

論文要旨は所定の 20 分で過不足無く説明されたので、直ちに質疑応答に入った。

まずは、本論文が達成した事柄や学界に与えると思われるインパクトを説明するよう求めたところ、達成としては、農業社会の近代家族を対象としてきた従来の近代家族論が述べてきたところとは違って、モンゴルの家族における性別役割分業はそもそも遊牧生活に由来する伝統的なものであり、社会主義時代に一掃されはしたが、社会主義崩壊後の民主主義時代に復活したことを明らかにしたことと、モンゴルにおいて核家族はゲルという居住形態に規定されて前近代から今に至るまで連綿として存在していると述べた点であると回答した。学界に与えるインパクトと考えているのは、体制移行期前後の家族変容に関する研究はロシアや中国にはあるが、モンゴルの体制移行前後の家族を比較した研究はこの論文が初めてである点でインパクトを有し、モンゴルの 21 世紀家族の予測も独自のもので、21 世紀には家族の個人化が進むと見る大方の見方とは異なり、モンゴルでは家族は崩壊せず、むしろ現在の日本の近代家族のような状態になるとの論も斯界に対するインパクトを有する、と回答した。次いで、アンケートの対象となった人々についての説明が求められ、烏日麗格氏は適切に回答した。次に、現在の日本の家族は情愛にだけ頼った情緒的關係のみで成立しており、密閉された空間の中で家庭内暴力などが起こっていることが問題とされているが、現在のモンゴルの家庭における問題とは何かとの質問があった。これに対しては、現在のモンゴルの家庭の問題として指摘すべきなのは、公教育の授業時間が短く、そのぶん家族が子どもの教育を引き受けざるを得なくなっている点だと回答した。次に、社会主義から民主主義への体制移行を経験した国家の民主主義的 21 世紀家族は、従来の近代家族論が明らかにしてきた「近代家族」の特徴を備えるけれども、それは落合の「近代家族論」でいう一時的、歴史的に表れる特徴ではなく、社会主義時代と民主主義時代の歴史の各段階で徐々に形成され、21 世紀に入って「近代家族」の特徴を表すものであると烏日麗格氏は主張するが、「一時的、歴史的に表れる特徴ではな」とする氏の見解は誤りではないかという意見が示された。これに対して烏日麗格氏は、モンゴルでは近代家族は崩壊しないと見ており、その特徴も一時的かつ歴史的にのみ存在するのではなく、社会主義・民主主義時代を通じて継続して形成され変化していくと考えているので、近代家族の特徴を特定の時代にのみ表れるとする説は採らないとする自説を展開した。また、先行研究が挙げた近代家族の諸特徴を忠実に検証しようとするあまり、家族成員間が情緒的關係で結ばれているという特徴と、性・愛・生殖が結婚を通じて一体化することがモンゴルでは社会主義時代にも民主主義時代にも見られなかったことを一つの問題として扱い、「家族成員間が情緒的關係で結ばれている」ことは、社会主義時代と民主主義時代いずれの時代にも形成されなかったことと述べてしまったような問題を惹起したので、独自の仮説に基づく方法を作るべきではなかったかとの

質問があった。これに対して烏日麗格氏は、自説は家族は愛情によってつくられると主張しているのであって、家族成員間の情緒的関係の中に性・愛・生殖の婚姻を通じての一体化を加えたのは落合氏であり、烏日麗格氏自身はこの性・愛・生殖の婚姻を通じての一体化を家族成員間の情緒的関係から除外していると回答した。また、烏日麗格氏は、モンゴルでは近代家族は解体して個人化し再構築されるのではなく、従来の遊牧的伝統が復活すると述べているが、日本と同様にイエから核家族化を経て個人化するのではないかとの問いに対し、烏日麗格氏は、モンゴルの近代以前からあった性別役割分業が現在復活して、女が家で子供の面倒を見て、男が外で働くという形が広まりつつあることから、従来の遊牧的伝統は復活しつつあると見てよいと回答した。次に、体制移行後のモンゴルの家族の特徴の中に「社会主義の遺産」はどの程度あって、それは今後なくなっていくのかとの問いに、家内領域と公共領域の分離、夫婦の公共領域への進出、婚姻が愛情によって結ばれること、非親族を家族から排除すること、家族の強い集団性、核家族志向、これら特徴が「社会主義の遺産」であると回答した。次に、社会主義時代においては国家が担っていた福祉政策が、社会主義崩壊後の民主主義国家では家庭に戻された一連の経過を、「私」が「公」から分離したものであるとする烏日麗格氏独特の見解にたいし、社会主義時代に国が担っていた福祉を、民主主義時代に入って家庭という私的領域に位置付けたと見るのが家族社会学の一般的な理解であるので、烏日麗格氏の理解について説明するようにとの求めに対し、烏日麗格氏は、家族の福祉は私的領域に属するものであり、社会主義時代にはそれが国家という公的領域が担っていたという理解に立っていることなどを回答した。審査委員からの最後の問いは、公と私の分離とは私的所有権が確立するということであり、社会主義はその私的所有を公有化し、私を公に吸収し一体化していた状態なのであって、社会主義において公と私の分離がないという言い方は正しくないのではないかと、との問いに対し、烏日麗格氏は、社会主義時代の家族とはまさに「国家に属している家族」であり、民主主義時代の家族は「家族に属している家族」という理解を持って本論文の考察を展開しているため、社会主義時代には公と私は分離していないという見解に立っていると回答した。

烏日麗格氏は、いずれの質問に対しても、本論文で展開した考察の範囲を逸脱せず、自説をよく堅持しながら適切に回答したと評価できる。なお、これ以外にフロアから二問の質問があったことを付記しておく。

## 7. 最終試験結果の要旨

公開審査に引き続き、最終試験として、審査委員長が、この研究の意義やインパクトを北東アジア規模に広げて説明しなかった理由を尋ねた。これに対して烏日麗格氏は、この研究で重んじたのは、これまでの近代家族論で論じられてきたことをもってモンゴルの家族を考察するという点であるが、この論文における考察の結果がモンゴル型近代家族論として結実しているか否かは、今のところは明らかではないとの自覚があるため北東アジア規模に広げることには慎重でありたいとの回答があった。この回答は、烏日麗格氏が設定した本論文の目的とする「北

東アジア国家の都市家族の変容理論」や「北東アジアにおける家族変動を貫く理論」の構築には未だに至らなかったことを示している。しかし、北東アジア地域とは、人類の文明を築き上げてきた農耕文明と牧畜文明が併存し、前近代から資本主義と社会主義とが併存している地域である。このことと、烏日麗格氏が明らかにしたのが、遊牧文明に立脚して社会主義・計画経済から民主主義・自由経済に移行したモンゴルの都市家族の変遷理論であることを考えあわせるならば、烏日麗格氏は、「北東アジア国家の都市家族の変容理論」や「北東アジアにおける家族変動を貫く理論」の一半を構築したとも言う。北東アジアの一隅を占めるモンゴルから、これまでに類を見ない家族社会学の成果を得られたことは大きな意義を持つと評価できる。

最後に、審査委員一同と烏日麗格氏は、この論文での達成をさらに発展させるために必要となることについて議論した。審査委員は、論文全体にかかる落合恵美子の近代家族論を越えた独自のモンゴル家族論を打ち立てる必要があり、そのための考察の枠組みを新たに作るために、近代家族論以外の家族社会学に関する知識を深めるべきであるとの考えを示し、烏日麗格氏の見解を質したところ、これに完全に同意するとの回答を得た。

#### 8. 審査委員会の所見

以上により、審査委員会は全員一致で本論文が博士（社会学）の学位を授与するに値するものと判定する。